

『我々の時代に』に隠された “a pretty good unity”

幡 山 秀 明

宇都宮大学教育学部紀要

第64号 第1部 別刷

平成26年（2014）3月

“A Pretty Good Unity” Hidden in *In Our Time*

HATAYAMA Hideaki

『我々の時代に』に隠された “a pretty good unity”

“A Pretty Good Unity” Hidden in *In Our Time*

幡山 秀明

HATAYAMA Hideaki

1.

Hemingwayの*In Our Time* (1925) に関して、個々の短編の作品分析の他に中間章のソース、原稿段階での変更等、テキスト生成過程についても詳細な研究がなされてきている。特に、作者本人の言及した“a pretty good unity”¹を巡ってテキスト全体の構造やパターンが考察され、短編連作集としての各中間章や各短編の有機的関連性が指摘されている。

例えば、Keith Carabineも短編集全体としての統一性を指摘し、内容から物語を4つに、vignettesは5つに分け、その並置による効果を考察している²。Michael S. Reynolds編、*Critical Essays on Ernest Hemingway's In Our Time* (1983) に収録されたRobert M. Slabey, “The Structure of *In Our Time*” では、中間章について“The basic thematic movement of the chapters of *In Our Time*, therefore, is two folded: the loss of value (I-VIII) and the search for a cord (IX-XIV), concluded with an ironic postscript-picture of decadence and impotence.”と分類され、物語については“In broad outline, with occasional counterpoint, the fifteen stories trace chronological events in the life of one man, Nick Adams. The list below indicates a four-part pattern: A. Nick Adams: The Young Man; B. The Effects of War; C. The Failure of Marriage; Sports: The Search for a Code”³というように4つにパターン化されている。また、Clinton S. Burhansの“The Complex Unity of *In Our Time*”は“vignettes”⁴=6+5+6とする。そして、物語についても内容から分類して、“As he did with the vignettes, then, Hemingway arranges the stories of *In Our Time* in a subtle and significant structure. From youth to maturity, from innocence to experience, from peace to war to peace again, and from America to Europe and back to America, he exposes a central consciousness, whatever names he gives it in the different stories, to the basic realities of the world and the human condition.”⁵と考える。他にも、Jackson L. Benson, “Patterns of Connection and Their Development in Hemingway's *In Our Time*”は、Burhansの考察の補足としながらも、見る行為が“the central unifying force”であるとし、それを“(1) the act of seeing as overview, and (2) the act of seeing as person”⁶と二分する。さらに、中間章と物語との相互関連について言及しながら、“The women screaming in childbirth”や“unsatisfactory marriage relationships,”そして“the death-in-birth”などに分類している。David J. Leigh, S.J.も“*In Our Time*: The Interchapters as Structural Guides to a Psychological Pattern”⁷でその相互関連性を3つのパーツに分けてさらに検討している。

In Our Time 構図 (2 Cycles :

縦の展開 1～7 → 1'～7'

10代7年間の経験(生と死への目覚め、初恋、友情、戦地、帰郷)

横の関連

(序) “On the Quai at Smyrna” (30年に追加。希土戦争・難民・死んだ赤子・驟馬)

1. 誕生 (目覚)
1'. 再出発

2. 夫婦のずれ
2'. 夫婦のずれ

3. 男女のずれ
3'. 男女のずれ

4. 泥酔
4'. 泥酔

5. 友情
5'. 友情

6. 裏切り・失望(女)
6'. 裏切り・失望(父)

7. 休息・救済
7'. 休息・救済
(救済・再出発)
・再生へ

	前 半
1	15年Champagneの戦いへの行進、泥酔兵士、臆病 <u>“Indian Camp”</u> 難産、男の弱さと死
2	希土戦争、難民、荷馬車中出産 (22/10/20の目撃) <u>“The Doctor and the Doctor’s Wife”</u> 父の弱さ、脆さ
3	Monsの戦い、庭園をよじ登る独兵 (友人話) <u>“The End of Something”</u> 恋と別れ
4	モンスの戦い、無益なバリケード <u>“The Three Day Blow”</u> 友情と別れた恋への思い、酒、林檎
5	希腸チフス閣僚処刑、(22/11/28新聞記事改竄) <u>“The Battler”</u> 栄光と挫折、男の脆さ、狂気
6	ニック負傷 “a separate peace” <u>“A Very Short Story”</u> 戦傷、病院での恋、失恋、行きずりの関係
7	爆撃、祈り、売春宿 <u>“Soldier's Home”</u> 帰還兵、祈りの拒否、再離郷へ

* 太字はNick Adams 物語

荒廃・混沌からの再生・再天地創造)

19～25歳7年間（離郷、結婚、子供誕生、帰郷、再出発）

天地創造 1 + 1'

（混沌・荒野から）

	後 半	
1'	The Kansan City Starハンガリー人移民強盗記事（917/11/19） “The Revolutionist” 1919、ハンガリー人革命家離郷	1日目 光 1'日目 光
2'	戦後、若い闘牛士の奮闘とヤジ（西） “Mr. and Mrs. Ellioy” パロディ、子作り奮闘、3角関係（米～欧）	2日目 大空 2'日目 大空
3'	闘牛、垂れ下がった馬の内臓、グロテスク（西） “Cat in the Rain” アメリカ人夫妻、猫、皮肉（伊）	3日目 海と地 3'日目 海と地
4'	弁髪切られた臆病闘牛士（西） “Out of the Season” アメリカ人夫妻の罫釣失敗、酔（伊）	4日目 太陽・月 4'日目 太陽・月
5'	血を噴く闘牛（西） “Cross-Country Snow” スキー旅行、友人、妻の妊娠（スイス）	5日目 生物（魚・鳥） 5'日目 生物（魚・鳥）
6'	ルイスの臆病さとマエラ、“I”（西） “My Old Man” 父の落馬、不正、墮落、失望（欧）	6日目 家畜・獣 人間（男と女） 6'日目
7'-1	マエラの死（西） “Big two-Hearted River : Part 1” ニックの罫釣（故郷）	7日目 安息日 7'日目 安息日
7'-2	サム・カーディネラ処刑の朝（23/9/15）、死、無様“Be a man, my son” “Big Two-Hearted River : Part 2” 翌朝、罫釣、儀式、再生	エデンの園 楽園追放→ ・男の試練（Adams） ・女の難産（Eve）

（結び）“L'Envoi”（楽園追放・米へ・風刺）

2.

こうした従来の研究を踏襲しながら、W.E. Tetlowは、*Hemingway's In Our Time*⁸の中で、Nickの負傷を示す6章を転換点としてテキストをその前後の2つに分けているが、果たして妥当であろうか。そして、断片的物語を関連づけて何らかの統一性を求めた、彼女以前の総ての研究についてもまた適切な考察なのだろうか。

『我々の時代に』は、「序文」に当たると思われる1930年に後付けされた“On the Quai at Smyrna”と「後書き」の“L’Envoi”を別とし、また、“Big Two-Hearted River”の1部と2部を合わせて1つとすると、14の物語と15の中間章から構成される。中間章が15になるのは“Big Two-Hearted River”が2分割されているためであるが、ここで重要なのは、“Big Two-Hearted River”が量的に長いからという物理的理由は別にして、なぜ14+1としたのかという点である。さらに、*Men Without Women* (1927) と *Winner Take Nothing* (1933) 収録の短編数は各14であり、*The Fifth Column and the First Forty-nine Stories* (1938) では、タイトルに明示されるように49+1となっている。カバラ等の数秘術によると、49は7の平方で完全数を示すそうだと。そして、その後の第一歩であるこの『第五列』はスペイン内戦を舞台とする戯曲であり、作者の新たな戦争舞台での新たな試みであると言えることができる。

こうした数字は偶然であるかもしれないが、数字7とその倍数に対する作者の何らかの拘りがあると考えられないだろうか。『我々の時代に』の構成を考える上で、「14+1」の意味を考えていく必要があると思われる。

旧約聖書「創世記」を連想するのは唐突ではない。“garden”や“apple”などについての指摘は既になされてきている。だが、それだけには止まらず、「創世記」が構造的かつ内容的にも『我々の時代に』という虚構世界の統一原理になっているのではないかと考えられる。神が最初に天地を創造し、その“formless”で“empty”な“the wasteland”の“darkness”に1日目に“light”を、2日目に“waters”を分ける“sky”を、3日目には地と海を、4日目は“seasons”と“days and years”を、5日目と6日目には水や空、そして地の生き物を創り、7日目に安息する。エデンの園にAdamを住まわせ、彼からEveを創るが、二人は禁断の果実を食べてしまい、楽園から追放される。そのときに神から課された試練は、“I will put enmity between you and the woman, and between your offspring and her offspring. He will bruise your head, and you will bruise his heel.” (3:15) という男女間の“enmity”であり、女には“I will greatly multiply your pain in childbirth. In pain you will bear children. Your desire will be for your husband, and he will rule over you.” (3:16) という運命が下される。

Adamには、“...cursed is the ground for your sake. In toil you will eat of it all the days of your life. It will yield thorns and thistles to you; and you will eat the herb of the field. By the sweat of your face will you eat bread until you return to the ground, for out of it you were taken. For you are dust, and to dust you shall return.” (3:17-19) という苦難の道が科せられる。楽園追放後、二人はCainとAbelを産み育て…という具合に話は続く。

女には「産みの苦しみ」、男には呪われた地での苦難、そして、男女間の「反目」が宿命づけられ、それが『我々の時代に』の物語内容の根幹となっていることを強調しなければならない。この根幹についての指摘は見当たらないが、各中間章と物語に関する従来の研究でも「生と死」や「出産」などの重要性が指摘されてきている点は言うまでもない。

3.

15の中間章と14の物語について、先ず7 + 7'（中間章は7 + 8'）というように前半と後半の2つに分けてみる。前半と後半の同番号に位置する物語は対応しているとする。例えば、2の“The Doctor and the Doctor’s Wife”と2'の“Mr. and Mrs. Elliot”は、タイトルや内容が類似していないだろうか。または何らかの共通点があるのではないか。さらに、前半と後半各最後の物語は“Soldier’s Home”と“Big Two-Hearted River”となり、7日目の（共に故郷での）休息部分とは考えられないだろうか。

その他の細かな説明は別の機会に譲り、次に7 + 7'は一巡目と二巡目という循環構造を示すと思われる。例えば、少年から夫となり、子を授かり、今度は父として子供と釣りに行くというような繰り返しはわかりやすいだろう。7 + 7'の14という合計は、1918年までと19年からという前半と後半に分かれる1925年までの作者（またはNick Adams）の人生にとっての14年間にも対応させているのではないか。とすると、15章や“Big Two-Hearted River”の2部には、次の新たな循環へ出発の暗示や予告といった必然的意味合いがあることになるわけで、発想的には*The Fifth Column and the First Forty-nine Stories*というタイトル、つまり、49 + 1と同じように考えられるのではないか。

では、何故このような7を基調とする作品構造を取り入れたのか。人生を60年周期で捉えたり、12年、10年といった区切りを考えることがよくあるが、単なる偶然ではあるまい。人類の、特にAdamの末裔としての男の人生を歩みながら、同時にそれを鳥瞰する視点が希求されたのかもしれない。負傷後苦悩し混迷する自己を救うには、一つには鳥瞰的に視野を拡大し、内的、かつ外的世界を秩序化して再統合することであり、それが回復への第一歩になり得るだろうし、「天地創造」に倣った自己再生のプロセスだったのかも知れない。勿論、それは宗教的理由からというより、作家志望の若者からすると創作ゲーム的であったと捉える方がいだろう。

次に、1から15までの中間章に関しては、従来から“interchapters”や“vignettes”として類似した内容からの分類がなされたり、中間章同士の縦の関連、また物語との横の関係が指摘されてきている。中間章は断片的ではあるが、それぞれ独立した場面や話として一般的には見なされてきている。しかし、作者が『我々の時代に』版として構成する際には、基本的に「インターチャプター」は各章の話の各“chapter heading”であり、「章題」を兼ねた「引用」や後続する物語の「前置き」という意味合いが強かったのではないだろうか。T.S.エリオットの詩には長い「章題」や序文で有名なものがあり、それに倣ったと推察できないだろうか。イタリック体表記の理由もそこにあるのではないのか。例えば、“Indian Camp”の直前にある、シャンパーニュの戦いへ行進する泥酔兵士を提示する断章は、「第1章 インディアン部落」の前置き、つまり長めの「章題」と考えられる。その前置きは、研究調査によると、作者が友人Mike Strater⁹から聞いた話だそうで、そこからの「引用」としてイタリック体の「章題」が配置されているのではないか。勿論、中間章同士の連続性や前後の物語との関連性もあるだろうが、まずその直後の物語“Indian Camp”とどうかかわっているのか、考察すべきであろう。結果的に、第1章の物語は長めの「章題」後の“Indian Camp”ということになる。

1'、つまり後半の最初の話に当たる“The Revolutionist”の「章題」はいわば「引用」で、Reynoldsによれば、1917年の*The Kansas City Star*の強盗記事によるもので、ハンガリー人強盗の射殺とイタリア人との勘違いを提示する。物語ではマジャール（ハンガリー）人で若い恥ずかしが

りやであるという意外な革命家について語られるというように、ハンガリー人という共通項が示される。さらに共に故郷という「園」を離れた異国での素朴な民族の運命が提示されているといえるかも知れない。3章は、1914年8月Monsの戦いでの「庭園」をよじ登る敵兵の一風景を示し、一見そうした第1次世界大戦とは無関係のような“The End of Something”の若い男女の別れ話も、作者の年齢からすれば、1914年頃のことかと推察される。ただ、前置きとしては長すぎる場合もあり、「章題」に止まらない「章題」の変容を見逃してはいけない。前半6章では負傷した兵士たちの様子が、Nickという名前と共に突然提示される。それに対応するのかのように13章、つまり後半6'章では“I”が突然声を発する。つまり、戦前と戦中の前半部分で、三人称の作者の分身が、戦後の後半部分では一人称の作者の分身が対応して姿を現すということになる。戦闘の真っ只中と闘牛場の周辺というように場所が変わるが、それぞれの戦いに関わっている。

4.

1910年から25年まで14年間における少年期からの成長、そして子供の誕生を控え、青年から父親になろうとしている、父と息子と父という3者関係、また、戦傷によるトラウマを抱えながら作家として出発し飛躍を期する男の話を前景とすれば、その背景となるのは、第1次世界大戦やそれに続くギリシャ・トルコ戦争であり、特にその両者の争いは19世紀初頭のギリシャ独立戦争に止まらず、さらにはトロイ戦争にまで遡る戦いの歴史である。

大団円の前のクライマックスともいべき6章は、Nickを介してこうした歴史的背景を前景化する。だが、重要な点は、歴史の舞台へと躍り出たはずであるにもかかわらず、負傷兵となってしまった男の不甲斐なさや無力さである。13章の“I”は、過去の戦争体験を熟成させながらも、戦後の闘牛という新たな壮絶な格闘の物語に介入しようとする作者の、思わず飛び出した声であろうか。そして、Nickや“I”は、それぞれ次の短編、各一巡最後の7日目の安息日へと続いていく。

“Soldier's Home”のKrebsは、ヘミングウェイがそうしたと伝えられているように当然家を出るだろうし、この気の休まらぬ皮肉な安息日の後どのような人生を二巡目として繰り返し、そしてまたどのような安息日を迎えるのか。そのためにも“Big Two-Hearted River”を考察する必要がある。

その前にStephen Craneの*The Red Badge of Courage*に触れておきたい。Henry Fleming という十代後半の男が南北戦争に志願し、自己の恐怖心や臆病さと葛藤していく物語であるが、勇気を奮い起こすきっかけとなるのは、上官たちに自分たち新兵が“mule drivers”と侮られているのを立ち聞きするところである。そして、上官たちへの復讐のために、思い知らせてやろうと馬鹿力を出し、猪突猛進の奮闘を見せることになる。他方、ヘミングウェイ1930年の改訂版で加えた“On the Quai at Smyrna”の最後に、“All those mules with their forelegs broken pushed over into the shallow water. It was all a pleasant business. My word yes a most pleasant business”¹⁰とあるのは偶然だろうか。「前足を折られた驢馬」に脚を負傷した作者自身の姿が投影されてはいまいか。そうだとすると、それを“all a pleasant business”と語る真意はどこにあるのだろうか。それに、彼もまたかつてはもう一人のHenry Flemingであったはずであろうし、1930年はもう一人のFrederic Henryを書き上げて間もないときであった。

『我々の時代に』には、兵士であれ、夫であれ、ボクサーであれ、闘牛士であれ、死刑囚であれ、男の臆病さ、弱さ、脆さ、狂気、無力さ、恐怖心、狡さ、愚かさが頻繁に露出する。作者が戦後トラウマに悩まされたこと、両親との軋轢、結婚後の1923年に長男が誕生するが、愛人ができて

夫婦間に亀裂ができるなどこれまで明らかにされてきている伝記的事柄を合わせて考えれば、“Big Two-Hearted River” に隠された苦悩の層は測り知れない。ここで一つ強調したいのは、この短編において作者はあくまで一個人のレベルで「男」^{マスキュリニティ}としての在り方を確認しているのではないかということである。そして、彼の場合には物語の中で、例えばFrederickのような「男」を造形することが、苦悩しつつ混迷する作者自身の「男」としての自己回復に通じていたのではないかということである。

子供ができたNick (“Cross-Country Snow” で) にとって、少年Nickを通して顧みた父と同じ姿を繰り返すような状況であって果して満足であろうか。また、“My Old Man” が何故 “Big Two-Hearted River” の前6’の位置を占めるのか、その無様な父親の姿はその説明になるかもしれない。さらに、6章の “a separate peace” の無様なNickの姿とんだお笑い種である “A Very Short Story” が、何故 *A Farewell to Arms* の物語へと変容するのか、その4年後29年までを視野に入れて “Big Two-Hearted River” を考えてみるべきであろう。

5.

14章の「章題」闘牛士マエラの死に続いて14番目の物語が始まる。Nick は、“the thirteen saloons” (133) も跡形もなく消えた焼け野原を歩いて釣場に向かう。“He felt he had left everything behind, need for thinking, the need to write, other need” (134) とあるように、全てから解放された状態で何かをしようとする。その何かとは？ 鱒釣りにはどのような意味があるのだろうか。

『我々の時代に』におけるT.S. Eliotの*The Wasteland*の影響については研究者による多くの指摘があるが、これまでのところ指摘のみで具体的な解説は未だなされていない。まず、*The Wasteland* の最後の一説を引用してみる。

I sat upon the shore
Fishing, with the arid plain behind me
Shall I at least set my lands in order?

...

These fragments I have shored against my ruins
Why then Ile fit you. Hieronymo's mad againe.
Datta. Dayadhvam. Damyata.

Shantih shantih shantih (423-33)

この箇所を “Big Two-Hearted River” に重ねて “I” をNickに代えてみると興味深い。“these fragments” は、原文では、救いや活力を求める内容の三つの引用句を指すが、ヘミングウェイにとってはまさに断片的な『我々の時代に』という自作であるのかも知れない。つまり、「こうした断片」からなる作品で「破滅しないようにしてきた」し、また、混乱や狂気から救う秩序立ての方法として「創世記」のパターンを活用したのかも知れないし、何よりも世間に背を向けて釣りをする姿が共通している。最後の2行は、雷の音に託してウパニシャッドの「施せ」、「憐れめ」、「制御せよ」、「心の平安」の意味を織り込んでいるとの解釈があり、ここでもまたNickの物語と無

縁ではない。“In Our Time”というタイトルが、イギリス国教会祈祷書の“give us peace in our time, O Lord”に由来するならば、その“give us peace”は“Shantih”の意味に通じる。また、“The Doctor and the Doctor’s Wife”で妻が夫に言う“Remember, that he ruleth his spirit is greater than he that taketh a city” (25) という聖書からの引用も思い出される。

*The Wasteland*という表題は中世のthe Fisher King伝説、または聖杯伝説に由来するようで¹¹、それによると、王は邪悪な欲望のために自らが不具と不能に陥り、国土もまた不毛の地と化してしまう。詩中の釣り人自身がその漁夫王であり、彼は生命の象徴である魚を得ようとしていると解釈される。ただ、Hemingwayが*The Wasteland*をどのように、どの程度理解していたのかは不明であるし、『我々の時代に』中の“Mr. and Mrs. Elliot”のようなパロディクな話を取り上げてみても、また、『武器よ、さらば』で有名な雨の逆説的な使い方（「エリオット夫妻」の後の“Cat in the Rain”の雨もまた不幸の前触れだろうか）を考えてみても、勿論単純に比較はできないが、荒廃した時代と崩壊しそうな不安を抱えた人間とその再生というテーマにおいては共通すると言えるであろう。

“He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other need.” (134) と述べるように、「考えること、書くこと、他の必要なこと」を一時停止にして、Nickは鱒釣りに専念する。これまでの自分の軌跡を振り返ると共に、自己回復と新たな目標のために、祈りではないにせよ、祈りの儀式にも似た決意をみせている。作中で克明に記録される鱒釣りは、2つのサイクルからなるという意味で、またさまざまなジレンマの狭間で苦悩するという意味で、「2つの心を持つ」状態からの再々出発のための一種の儀式であるのだろうか。少なくとも、鱒釣りには比喩的な意味合いが強いであろうことは、“Indian Camp”の最後の場面（鱒ではなく、バスだが）や“Out of Season”での釣りの失敗を思い返せばわかる。前者では、カットされた部分（“Three Shots”）を合わせると、臆病な少年Nickは夜釣りに行って結局何も釣ることなく、ただ夜明けに水面上に飛び跳ねるバスの姿を見るだけで終わり、後者でも釣れず仕舞いで、最後の最後まで持ち越されたことになる。勿論、“The End of Something”でもその仕掛けはするが、途中放棄されている。となると、最後の次の一節はより深い意味を持つわけで、これまでも多くの研究者が言及してきている。

In the swamp fishing was a tragic adventure. Nick did not want it. He did not want to go down the stream any further today. (155)

「沼地での釣りは悲劇的な冒険だ」として、その日はそれで切りあげる。そして、“There were plenty of days coming when he could fish the swamp” (156) と最後を結ぶ。「難局（スワンプ）での釣り」とはどのようなことを指すのであろうか。釣りが創作のメタファーなら、悲劇的な体験に基づく、悲劇的なまでの努力を強いる、悲劇と呼ぶべき作品に取り組むということになるだろう。多分それは自己の戦傷体験に基づく、後の*A Farewell to Arms*なのではないだろうか。戦場での体験は6章と“A Very Short Story”で決着がつくようなものではない。ヘミングウェイには、Henry Flemingのような若かりし頃の自己パロディや浅瀬で喘いでいる驃馬ではない悲劇的な男の物語を現代悲劇として書き上げようという目論見が既にあったのかもしれない。いずれにせよ、「考えること、書くこと」は続いていき、この後も新たな創作に挑んでいくという決意であり、出発点に

なっていると思われる。

時代と共に世代が変わり、例えば、成長した息子と共に、かつて少年時に父と叔父と夜釣りに行ったように、今度は父としてキャンプに出かけていくであろうし、さらにまた戦いもまた繰り返し、勇気と弱気の狭間の中で男たちの試練のときが繰り返されていく。

『我々の時代に』のこの結末はさらに「沼沢地」に拘ったJohn Barthを思い出させる。作品に隠された「統一原理」を見抜いたと思われるJohn Barthは、そのポストモダニズム版とも言うべき、Ambrose Menschを見え隠れさせながら同じく14の話からなる「シリーズ」として*Lost in the Funhouse* (1968) を構成する。そこではバース流の捻りが「メビウスの輪」となり、自己喪失の場は戦争ではなく「鏡の迷路」となり、ともに自伝的人物と言われるが、AdamsがMenschという名前となり、そして、絵画的または映像的描写が、多様な語りの実験室となる等、両作品はさらに比較検討される必要があり、そこからまた新たな問題が現れてくるだろうし、また、Barthの安息日に当たる7作目*LETTERS*における7への執着もヘミングウェイの『我々の時代に』解説が一つの契機になっていたのかも知れない。

¹ Edmund Wilson, *Shores of Light*. N.Y. : Farrar, Straus & Giroux, 1953, 123.

² Keith Carabine, “‘A Pretty Good Unity’: A Study Of Sherwood Anderson’s *Winesburg, Ohio* and Ernest Hemingway’s *In Our Time*” (Ph.D.Diss., Yale Univ., 1978)

³ Robert M. Slabey, “The Structure of *In Our Time*.” Michael S. Raynolds, ed., *Critical Essays on Ernest Hemingway’s In Our Time* (Boston : G.K.Hall, 1983), 78-79.

⁴ Clinton S. Burhans, Jr., “The Complex Unity of *In Our Time*,” *Modern Fiction Studies*, XIV(1968): 313-328.

⁵ Ibid., 316.

⁶ Jackson L. Benson, “Patterns of Connection and Their Development in Hemingway’s *In Our Time*.” Michael S. Raynolds, ed., *Critical Essays on Ernest Hemingway’s In Our Time*, 106.

⁷ David J. Leigh, S. J., “*In Our Time* : The Interchapters as Structural Guides to a Psychological Pattern.” Michael S. Raynolds, ed., *Critical Essays on Ernest Hemingway’s In Our Time*, 130-137.

⁸ W.E. Tetlow, *Hemingway’s In Our Time : Lyrical Dimensions*. Bucknell University Press, 1992.

⁹ Ibid., 18.

¹⁰ Ernest Hemingway, *In Our Time*. New York : Scribners, 1925. 以後*In Our Time*からの引用はすべてこの版を用い、ページ数のみを本文中に括弧内に表記する。

¹¹ 『荒地・ゲロンチョン』福田陸太郎、森山泰夫 大修館 2001

参考文献

Adair, William. “Landscapes of the Mind : ‘Big Two Hearted River,’” Michael S. Raynolds, ed., *Critical Essays on Ernest Hemingway’s In Our Time*.

Benson, Jackson J., ed. *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*. Durham : Duke University Press, 1975.

DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway’s Short Stories*. Pittsburg : University of Pittsburg

Press, 1963.

Fetterlely, Judith. *The Resisting Reader : A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington : Indiana University Press, 1981.

Flora, Joseph. *Hemingway's Nick Adams*. Baton Rouge : Louisiana University Press, 1982.

Stewart, Matthew. *Modernism and Tradition in Ernest Hemingway's In Our Time* (Camden House), 2001.